

どくどくマンボウ昆虫記
どくどくマンボウ小辞典

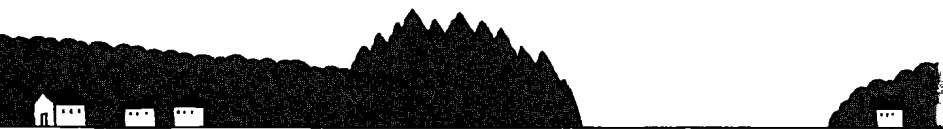


北杜夫



どくとるマンボウ昆虫記 どくとるマンボウ小辞典

北杜夫全集 — 12



新潮社版

どくとるマンボウ^{こんちゆうき}昆虫記・どくとるマンボウ^{しょうじてん}小辞典



〈北杜夫全集12〉

一九七七年四月二〇日 印刷
一九七七年四月二五日 発行

定価 一〇〇〇円

著者 北^{きた} 杜^{もり} 夫^お

発行者 佐藤 亮 一

発行所 株式 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一(〒一六二)
電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一一
編集部 東京(〇三)二六六一五四一一
振替 東京 四一八 〇八番

印刷 株式会社 光邦
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えます。

目 次

どくとるマンボウ昆虫記
どくとるマンボウ小辞典
『へそのない本』より

初出と収録

338 253 137 5

どくとるマンボウ昆虫記・どくとるマンボウ小辞典

どくとるマンボウ昆虫記

目次

人はなぜ虫を蒐めるか	7
冬から春へ	15
詩人の蝶	20
神聖な糞虫	26
虫とり百態	31
蟻は人類をおしのけるか	40
まんぼう、憶い出を語る	48
変ちくりんな虫	56
蜻蛉、薄馬鹿下郎	61
さまざま甲虫	69
天の蛾	78
蟬の話	83
まんぼう、ふたたび憶い出を語る	89
高山の蝶	94
水に棲む虫	100
秋なく虫	105
まんぼう、沖繩をゆく	111
蜂の生活	119
どのようにして虫を防ぐか	124
あらずもかなのしめくくり	130

人はなぜ虫を蒐めるか

七面倒な理屈はいわぬ。とにかく物をあつめたがる人種がいるのは確かなことだ。

人々は切手をあつめる。人形をあつめる。キイホルダーをあつめる。ビンやらかワラケをあつめる。これはもう理屈ではない。ある種の分裂病患者に「濫集症」というのがあるが、およそ役に立たぬもの、汚らしいもの、捨てるよりほかないものを、無闇やたらと蒐集する。彼らはそうして集めた毛髪、木片、ボール紙の切れっぱし、爪の屑などをひしとかき抱き、他人がそばにくると一片でも渡してなるものかという表情をする。そつとしておいてやったほうがいい。

飛驒の高山で石ころを集めている人に会った。べつに珍しい鉱石とか価値のある庭石を捜すのではなく、その石がなにかに似ていさえすればこの人には嬉しいらしい。彼は日曜日にはからのリュックサックを背おって河原に出かけ

てゆき、帰りにはずっしりと重い荷物をフウフウいつてか
ついでくる。しかし腰の痛み、背の痛みなんてそもそも何
であらう。ガラガラと彼は収穫物を畳の上に投げだす。そ
の歓喜、床がぬけたとしてもそんなものが何であらう。
「これをごらんさい、どうです、私は平和とこの石に名
づけました」

見ると、なんのことはない丸っこい石が小さな坐布団の
上に鎮座している。

「どうです、似てましよう、そっくりでしょう？」

「ははあ」

こちらは何に似ているのかと全智全能をめぐらすが判じ
がたい。タマゴか？ ブタか？ いやいや、それはやっぱ
り一番石に似ている。

むこうはしまいに辛抱しかねたような声をだす。

「わからないのですか。ハトです！ まるでハトそのまま
じゃありませんか」

なるほど、石に似ていた石ころは見る見る鳩に変型して
くる。そういえば胸のふくらみ方、首の丸まりよう、これ
はたしかに鳩である。しかし相槌をうてば相手はたちまち
機嫌を直す、調子にのって讚めすぎぬことだ。

「それなら、あなたにぜひお見せしたい石がある。いまこ
こにありません。ちよっとそこまで」

この「ちょっとそこまで」は概してたいへんに長い。いい加減足が棒になったころ、相手は一軒の店の飾り窓に歩みよる。そこには彼のもっともお気に入りの石が飾ってあるのである。本当はころがしてあるといったほうがいいのだが。

「どうです？」

相手は得意さと期待のため語尾をふるわせる。こちらは今度こそと目の玉を二倍にしなければならぬ。そう、これはたしかに山らしい。そうでなければピラミッドかでき損ないのオムスビだ。

「山のように見うけられますが……」

「そうですとも！ その通り」相手はふかいたため息をつく。「しかし、ただの山じゃあない。どうです、どこかの山に似ておりませう？」

「さあ、なにぶん私は山は苦手です」

これは嘘だ。私はかなりの山を知っている。

「乗鞍ですよ。そら、そこにそびえている乗鞍。ほら、この白い部分が雪溪、ここの黒いところが、なんだと思います？ 這松、這松です！」

「そう言えば本当に……」

「這松ですとも、這松。まるでそっくりじゃありませんか。これは奇蹟です。この石が手にはいったのは神の恩寵と言

いましょうか。あなた、私はその日、朝から妙な予感がしていましたよ。まあお聞きなさい、私がどんな偶然でこの石とめぐりあったか……」

彼は話し、語り、しゃべくり、詠歎する。聞かされるはうこそ災難というものだ。ついにはせっかくの乗鞍岳に似た名石も、どんなタクワン石より欠伸あくびをもよおさせる存在と見えてくる。

といって、一つものに執着せず、はなはだ移り気な蒐集家もいる。

沖繩の那覇で、キャバレーに勤める一人の女人と話した。彼女が子供のころから蒐集したものは両手の指では数えきれない。最近ではマッチの箱をあつめたが、レットルだけでなく箱ごと集めたもので、狭い彼女の部屋はついに居住する場所として不適となった。彼女はヒステリーを起して無数のマッチ箱を焼きすて、現在は週刊誌の裏表紙を集めているそうである。これなら場所をとらないし、週刊誌というものは元来よみすてるものであり、ましてや裏表紙をあつめる者なんて他にいないから、何年かたてば自分の蒐集物はきつと有意義なものになるにちがいない、と彼女は話して丸っこい鼻の頭をこすった。

このように蒐集家のなかには、他人のあつめていないものを集めたがる者とか、ある種の蒐集物に関しては完全無

欠を要求したがる者が少なくない。

物語の世界となると大物がいる。マーク・トゥウェーン語るところのイシュリエルとかいう叔父さんは、蒐集品が全部そろっていることに値打ちをかけた。まず牛の首につるす鈴を五つの広い座敷一杯あつめたが、ただ一つ、古風なたった一つ残っている見本をほかの蒐集家が手に入れてしまった。相手はどうしてもそれを売ってくれない。叔父さんは悲観して、牛の鈴のことをあきらめ、他人が手をつけていそうにないものをやりはじめた。彼は燧石ひうちいしの手斧とか、アズテック人の碑文とか、鯨の剝製、さてはレンガの破片などをあつめてみたが、いつもいよいよ蒐集が完璧だと思えたとき、新しい品物があらわれ、新しい別の蒐集者がそいつを手に入れてしまった。叔父さんの黒かった髪の毛は、こうして雪のように白くなった。

そこで彼はしばし休んで考えた末、これなら絶対と思えるものを選びだした。それはコダマであった。何だつて？ つまりヤマビコなのだ。まず最初に買いいれたのは、四度くりかえすジョージア州のコダマで、次のはメアリランド州の六回くりかえす奴であり、次にはメイン州の、という具合に買いますんでゆき、値の安い小さな二連発のコダマは山ほど買いいこんだ。そうして予定どおりとほくそえんでいたところ、突然、大コーイヌア、すなわち反響の山とし

て世界に知れわたった神々しいコダマが発見されたのである。同時に、もう一人のコダマ蒐集家がいることが判明した。二人は争つてこのコダマを買いこもうとしたが、二つの岡からなっているその地所の片方ずつしか買ひとることができなかった。どちらの男も半分だけコダマを所有することに満足せず、口論し、争い、控訴しあい、これがいへんな裁判となつて、せつかくのコダマも以来反響させるわけにいかなくなつてしまった。

もういい。

かくのごとく各種さまざまな蒐集家がいる以上、虫をあつめる人間がいたとてなんの不思議があろう。虫ケラ蒐集家がゴマンといたとて、彼らがあつめる虫の種類に事欠かないのである。

一体虫にはどのくらい種類があるのだろうか。

ミシュレの時代にはまだ十萬種くらいしか知られていなかった。「だが、あらゆる種類の植物が少なくとも三種の虫を養っていることを考えると、三十六萬種の昆虫が存在することがわかる」と彼は書いているが、現在ではおよそ六十萬種、いや少し多目に七十萬と言つておいたほうがよいだろう。なぜなら、まだまだ新しい種類がどんどんと発見されているからだ。昆虫学者、昆虫研究者、昆虫採集家、

昆虫蒐集家、昆虫愛好家、虫ズキ、虫キチガイ、虫バカがそれだけの証拠である。

その名称に依じて、彼らはいろんな虫の集め方をする。

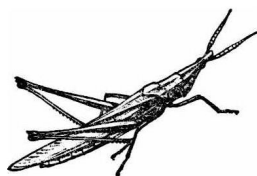
カイコの芋虫にしか手をださぬ学者もいる。雄性生殖器をしらべるためにだけシジミチョウをとる研究者もいる。採集家となると、初めは虫と名がつけばやたらと網にいれてしまいが、そのうち好みがでてきて、カミキリムシには目がないが、トンボがとんできても知らん顔をしている。蒐集家はやはり綺麗な蝶とかタマムシをあつめたがる。愛好家は一番い로운な素質をもち、なかには虫と睨めっこをしたあげく笑いだして放してしまふ者もいる。虫ズキもとりどりだが、シラミやらナンキンムシを一杯身体にたからしたりする。虫キチガイはムシ、ムシ、ムシと呪文をとなえて藪をガサガサやり、木にかけのぼる。虫バカは虫を見るとニタリとし、おどろくべき早わざで掴みとり、パッタでもヘッピリ虫でも口に入れてしまふ。

本当はこのような厳密な区別はなく、彼らはお互いに入りみだれ、入りみだれながら虫を追いかけるので虫だって大変だ。だが、どうして彼らはこんなふうに虫を追うのだろう。

虫のタタリということもある。先祖が戦争をして広大な林を焼きはらい、数えきれぬ虫を殺戮したのかもしれない。

そのタタリでまた虫を殺すというのも腑におちぬと言う人がいるだろうが、タタリをうけた人はたいいてい膨大な数を有する虫、たとえばアリなどの採集家になっている。とつてもとつてもきりがない。子供のとき虫に刺された腹いせに、ノミだの南京虫だのを集めだす者もいる。ノミといつても動物によって種類がちがい、人にはヒトノミが、犬にはイヌノミがたかる。シャルル・ロスチャイルドというノミの蒐集家は一艘の船を北極へ派遣し、毛皮商人を訪ねて、白熊、トナカイ、エスキモーの犬などのノミを蒐めさせた。なかには未来の地球は進化した昆虫によって支配されると信じきり、人類のため本気で虫たちに宣戦布告をした男がいる。宣戦布告をしたとたんにハチに刺されたもので、彼はますます妄想をかためてしまった。だが、こういうたぐいはむろんのこと例外だ。

誰だつて子供のころ、虫を追っかけた経験のない者はあるまい。いとすれば兇悪犯人になる素質がある。ただし女の子はのぞかなくてはならぬ。彼女らはそんな余計なものに興味を示さない。その代り大きくなると、なにやらピラピラした極彩色の衣服をつけ、自分が蝶々になったつもりでいる。本当は蛾くらいなのだが、自分では蝶のつもりで、そのためか女たちはみんな蛾のことを憎んだり嫌ったり怖れたりするものだ。



ショウリョウバッタ

ともあれ、原っぱの草むらをわけてゆくと、キチキチキチと鳴いて頭のがった流線型をした緑色のバッタがとびだす。子供はこれをキチキチバッタと呼ぶが、本当のキチキチバッタ（ショウリョウバッタモドキ）はもつと小型で音をださない。キチキチという奴はショウリョウバッタである。ついでバタバタと羽音をたてて大型のトノサマバッタがとびだす。これの子供のころ私たちはオオトと呼んだが、どういいう意味なのか未だにわからない。子供は勝手にいろんな名前をつける。しかし昆虫学者だって本当は勝手に名をつけるのだ。カトンボのことをガガンボという。これまたどういいう訳かわからぬが、正式の和名ではガガンボといわねばならぬことになっている。

バッタはキリギリス、コオロギなどと共に直翅目に属する。コオロギの雌は土の中にかく卵をうむため長い産卵管を持つているが、バッタの産卵管はごく短い。それでも卵をうむときは腹部がジャバラのようにのびるから、やはり土中にかく産卵することができ。だが、こんなことは余計なこと、すぐさまそんなことを観察する子供は早死をする。やはりバッタは糸でつないで遊ぶのがいい。それで

なければ猫にやる。カマキリを猫にやると、カマキリは羽をひらいておどろおどろしい威嚇をするが、猫は平気でくわえてもっていつてしまふ。あれは残忍な生物である。しかし面白がつて猫に与えるのは、さらに残忍といわねばならぬ。夕ぐれになると、原っぱの上空をギンヤンマが飛びかいた。子供がギンとかチャンとか言っている奴だが、同じ種類の雌雄なのだ。こいつは素早く、とても小さな網では手がとどかない。どうしてもモチ竿ということになる。

モチといえば、あの懐かしい、かつ怖ろしい手ざわりはどこへ行ってしまったのだらう。むかしは玩具屋へゆくとモチを売っていた。小さな空カンをもって買いにゆく。その中に水を入れ、水の中にモチを入れる。こうすると手にひついたりしないのだ。ところが、ひつつかないことになっているはずなのに、こいつはやっぱりひつついてくる。慌てて手をうごかすと顔にべたついてくる。髪にくらいつく。モチ竿に満足にモチをぬりつけるまで、あちこちもうたいへんな騒ぎだ。

いざ用意が整って、モチ竿を斜めにかまえると、名槍をもったサムライの気分になる。ギンやチャンや赤トンボ（夏にいたるのはナツアカネ、少しおくられて出てくるのをアキアカネという）目がけて、シャニムニおどろかせる。本当は先端だけをブルブルとふるわせるのが術なのだ。しか

しカッと昂奮しているから、ふりまわし、ふりおろし、横にはらう。それだけ空気をひつかきまわして、ただの一匹もトンボがくつかないのは実際奇蹟だ。だが、ヤンマ相手では奇蹟がいともたやすく実現してしまう。翅のかけらひとつ獲れやしない。その代り草っ葉やら泥やら他人のボ―シやらがくつついてくる。

気がついてみると、もうお互いの姿もおぼろになっている。夜が夕ぐれを追いはらって、そここの草むらから湧きあがってくる。夜はやっぱり怖い。人サライだの吸血鬼だのの匂いがある。おまけにおなかガベコベコだ。空腹になつて血液中の糖分がへると人は怒りっぽくなるというが、それは大人の話で、子供は余計なもの寂しくなる。

むかしはこんなふうに唄ったものだ。

「カエロがなくからカエロ」

近ごろでは蛙も郊外へゆかねば鳴いてくれない。

「トンボは益虫だからとてはいけません」

そんなことを言つたつて、大体トンボがいなくなつた。

悪童たちのせいではなく、ビルだの高級アパートだの高速道路だのせいである。

トンボがいたら、子供たちよ、追いかける。それが子供であり、残された最後の本能というものだ。

さよう、子供たちは本能的に虫をとらえる。それらが美しく、奇妙で、動いたり飛んだり跳ねたりするからだ。いかめしい角があったり、まばゆく輝いたり、優雅にまたやかましく鳴きたてもするからだ。

捕えた虫は、羽をむしつてもいいし、油でいためてもいいし、籠にいれてじつと眺めてもいい。それは子供たちの自由で、虫をふんづぶしたからといって、あるいは虫にキスしてやったからといって、それだけで彼らの性格を云々してはいけない。好奇心、これが人類をあやつつてきた最初の力である。

幼いジャン・アンリ・ファープルの憶い出をきいてみよう。

きびしい氣候にいためられ、畑にもろくな作物のできないその村では、めぐまれた地主はヒツジを飼つていた。その糞をこやしにしてジャガイモを作る。ジャガイモが家で食べる以上できたなら、その余分でブタを飼う。ところがファープルの家では家畜一ついないのだった。

父と母とはある晩相談をする。

「アヒルを飼つたらどうかしら。町じゃよく売れるわ。アンリに番をさせて、川につれていかせたらいいじゃありませんか」

「いかさま、さよう」

なんとという素晴らしい話！ その案は実現して、幼いフアーブルはよちよち歩くアヒルの群を、ごつごつした道にかかるとマメをこしらえながらビッコをひいて追ってゆくことになった。棚の隅にしまつてある靴は、お祭りの日や日曜日にしかはくことを許されぬのだ。

しかしとうとう沼について、アヒルの子が口をばくばくさせて泥をすくいだし、何もかもうまくいっているとなると、今度はアンリの目が輝きます。彼は水底の泥のなかに、灰色のぬるぬるしたヒモみたいなものを見つけた。指の間をつるつるすべて掴まえていく。節がやぶれると、ピンの頭ほどのくろい玉に平べったい尾がついたばかりに小さいオタマジャクシがでてくる。このによるによろした紐の正体はこれでわかった。つぎには沼の横のハシバミの林の中で、たとえようないほど綺麗な青色をしたコガネムシを見つめる。天国にいる天使はきっとこんな着物をきているにちがいない。こいつはカタツムリの殻に入れて葉っぱでふたをする。まだまだ珍しいものはたととある。石をこわしてみると、そのくぼみの底に、教会堂のシャンデリアの垂れ飾りのようなキラキラ光る結晶が見つかった。すぐさまポケットに入れる。まだまだいろんなものがたととある。みんなポケットにつめこむ。

しかし、お祭りのようにうきうきと、沢山の宝物、夢の

ような秘密を抱きしめて戻ってきたアンリは、すぐと母親からどやしつけられる。

「せっかく子供を育てたって、だんだんこんなロクデナシになるんじや、ほんとに情けなくなるよ。石なんかつめてポケットを破いたりしてさ。虫だって毒があるんだから、どんな怪我をするかわかりやしないじやないか。虫なんかで一体何をしようってんだい。いい加減にしておおき。どうしてそんなとんでもない了簡りょうけんを起すんだろうねえ」

これでいいのだ。お母さんの意見は正しい。役にもたぬ虫ケラなんぞ集めるのは、実際とんでもない了簡だ。

ところが近ごろの教育方針はちがってきている。

「もって科学的精神を振興し……」というわけだ。

「捕虫網、モチ竿のたぐいは兎器と認めがたい」と警察でも賛成する。

たいていの子供はサイカチ（かぶとむし）の喧嘩、蜂の巣を叩きおとすこと、赤トンボの尻尾しっぽをむしってトウガラシとして売りつけることなどは大好きだが、科学的精神にのっとりて教師を感心させる標本をつくることなど本当は好きでない。

「夏休みの宿題ね、昆虫標本をこしらえるんだって」と、洗い顔をして家へ帰っている。

「昆虫標本？ そりゃあいい。台所のアブラムシを退治し

なさい」と父親がいう。

「あなた、そうはいきませんわ」と母親がいう。「一番立派な、そのヒョウホンとかをこしらえなきやPTAであたしの顔にかかりますわ」

そして、さっそく新聞広告をだす。

「学生アルバイト募集！ もっとも虫をとらまえるのが上手な方」

すると、私自体が虫類の巣です、などというむくつけき男が現われるので、母親はヒステリーをおこし、今年の夏は子供に虫をとらせるため山へ避暑にゆくと宣言する。そして、そういう場所を着るにふさわしい服だの靴だの日焼けクリーム（一般に日焼け止めクリームといわれているが、この名称の方が適当と思われる）だのをしこたま買いこんでくる。もちろん自分のをだ。山へ行つたとて近ごろの子供は一向に虫を採りはしない。新聞の株欄などをよんでいる。従つて夏休みの終りになると、デパートの昆虫売場は大繁昌だ。かくて学校の展覧室には台湾産の蝶がずらりと並ぶことになる。

まったくつまらないことだ。痛ましいことだ。それらの標本の大多数は、やがて打つちやられ投げすてられ、カビにつつまれ、カツオブシムシに穴をあけられ、その意味をまったく失つてしまう。これらの中には貴重な種類が見出

されることもなくはないのに。児童たちにはどうしてもというなら生態観察をやらせたい。虫をあつめるのはとんでもない了簡だといわれた昔のほうが正しいかもしれぬ。どんなに禁じられても、キチガイあつかいされても、ある

人々はやっぱり虫に惹きつけられてゆく。モンシロチョウがキャベツに惹かれ（菜の花とキャベツ島を比べると彼女らは後者のほうが好きだ）、ナミアゲハがカラタチに惹かれてゆくように。

宝石が美しいからといって、ニレにいるキンヘリタマムシやヤマハンノキにつくムネアカリハムシがそれに劣るとは思えない。稀少価値からいえば、世界で一匹しか採集されていない種類もいくらかもある。姿の不可思議をいえば、各種のツノゼミの妙チクリンさはピカソだつてダリだつて頭をさげよう。

しかしそんなことより、更にわれわれの目を見はらせるのは、千変万化のその生活にある。野で林で、ぬるむ水中で暗黒の地下で、孤独のふしぎな作業が、共同の偉大な国家が営まれている。この無言の呟きに耳をかたむけ、ひっそりとした驚異を垣間見たとき、——まあそんな話はこちら



ヨツコブツノゼミ